



TITLE:

いきなり編集長伝説(<特集>「物性研究」と私の思い出)

AUTHOR(S):

武末, 真二

CITATION:

武末, 真二. いきなり編集長伝説(<特集>「物性研究」と私の思い出). 物性研究 2012, 97(6): 1206-1208

ISSUE DATE:

2012-03-05

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/172066>

RIGHT:

いきなり編集長伝説

京都大学 理学研究科 武末 真二¹

「物性研究」の冊子体の発行が終わり、一区切りを迎えるにあたって、歴代編集長が何かを書くということになった。私も2004年4月から一年間、他の方に比べると短い期間ではあったが、編集長を務めた身であり、書かなければならないのだが、なかなか筆が進まない。その当時のことはあまり覚えておらず、何か思うところや伝えたいことがあるわけでもなく、ただただ駄文を書き連ねるだけになりそうだったからだ。しかし、暇を見つけて当時のメールを探し出して読み返してみると、そんな時代もあったねと感慨深いものがあった。皆さんに興味があるかどうかは知らないが、私の編集長としての一年がどんなものであったか、ご覧いただくことにしよう。まあ、どうせ駄文になってしまうであろうが。

記録によれば、当時編集長だった早川氏から次期編集長就任依頼の電話がかかってきたのは、2004年1月15日のことであった。自分は編集長も編集委員も辞める。本来編集長は基研スタッフの仕事であり、新任教授の太田さんが引き受けるのが筋なのだが、何だかんだ（詳しいことは忘れた）で引き受けてくれない。ついては、お前やってくれ、とまあ表現は違ったかもしれないけど、大意はこうであった。いや、ちょっと待ってくれ、とこちらは応じた。それはそうであろう、当時編集委員ですらなかった私にとって、寝耳に水とはこのことであった。編集委員でもない者が、いきなり編集長なんて務まるわけがない。現編集委員の中から編集長を出すのが筋だろう。早川氏は、原則はそうだが、あれやこれや（忘れた）で候補はお前しかいない、やれ²、と押してくる。今は、システム化が進んで編集長は編集会議の司会をするだけだ（そんなはずはないだろうと、私は眉につばをつける）、誰でもできるからお前でもできる、やれ（それならなおさら、現編集委員の中から選べばいいじゃないか、というのは心の中で叫んだだけであったか。）。いつになく、というよりいつも通りの早川氏の押しの強さに、次第次第に押し込まれて、私はついに土俵を割ってしまった。こちらとしては、一年間という期限をつけ、一年経ったら何が何でも辞めると宣言するのが精一杯であった。いや、それも受け入れやすいようにと、相手が言い出したことであったか。

とにもかくにも、そういう次第で編集長を引き受けた。いきなり編集長として会議を掌握するのは無理なので、3月の会議に見習いとして出席し、4月から編集長として活動することになった。そんな経緯だったので、「物性研究」をこうしたいというような強い思いはなく、小役人よろしく、先人の方針を受け継いで、恙なく一年を過ごせばよいかなと思っていた。幸いにして原稿のストックは十分にあるように見えており、投稿予定もたくさんあった。無理して原稿を取ってくるよう

¹E-mail: takesue@scphys.kyoto-u.ac.jp

²本当は、「お願いします」と言われたはずだが、たとえ「お願いします」でも「やれ」という意味、である。

なことをする必要はなかったので、平穩無事な船出だと思ったのだが、それは大変甘い考えだったということをすぐに思い知らされることになった。次々と大波が押し寄せてきたのである。

第一の難題は、とある研究会報告にまつわるトラブルであった。詳細は伏せるが、実は早川氏とその研究会の主催者との間では延々とメールのやりとりがなされてきたのだった。何だそれは、聞いてないぞと思ったが、経緯を詳しく調べた結果、結局私が出身研究室の大先輩に長い長い手紙（メール）を書いて決着を図ることになった。当たり前のことだが、編集長は決して編集会議の司会だけの仕事ではなく、常に決断と実行を迫られるタフな職務だということを、そのときははっきりと認識したのであった。それ以来、トルーマンに倣って“The buck stops here”の言葉を机の上に飾ったつもりになって、責任者としての覚悟を決めた。

第二の難題は、英語原稿に関することだった。1994年の30周年記念座談会でも触れられているように、伝統的に「物性研究」では日本人には日本語の原稿を書いてもらうようにしている。しかし、このときは英文のみの研究会報告が送られてきたのだった。国際シンポジウムだったのでそういう原稿が送られてきたようだったが、編集委員会で議論した結果、早川編集長時代の先例にならってアブストラクトのみ日本語にしてもらうように依頼した。ところが、世話人からは、それでは意味がないので原稿を取り下げるとの返事が来た。ここで問題になったのが、基研で行われた研究会の報告は「物性研究」または「素粒子論研究」に掲載しなければならないという基研の規定である。基研の意向を確認し、編集会議で再び議論したあげく、その研究会は日本語の前書きとプログラムのみを掲載することになった。同時に、同様の申し出に対処するために、今後研究会報告の取り扱いをどうするかという方針の議論が始まった。英語への移行は時代の流れであるという意見もあったが、全部英文ならProgressがあるのであり、ことは「物性研究」のレゾナントルに関わることだけに議論は白熱した。毎回欠席者もあり、同じ議論を何度も繰り返しながらようやく12月の編集会議で以下の方針が決定された。

当面は現状維持（原則は日本語）で、世話人から要求があれば、編集会議で議論、あるいは編集長の判断で、個別に検討して、英語も認める場合があるとする。

現時点では、「研究会報告 投稿要領」で、最初から英語を認めるとは明記しない。

但し、現在要求している外国人著者の日本語アブストラクトは、今後は要求しないことにする。

これを決めた直後に、さっそく英文の研究会報告を出したいという依頼が2件あり、いずれも日本人著者については日本語のアブストラクトをつけるということで対応した。この方針は現在に至るまで変更されていない。

そうこうしているうちに、第三の難題が襲ってきた。有り余るほどあると思われた原稿のストックが尽きてきたのである。にわか編集長の私には、適正な原稿の量の計算ができていなかった。目の前の難題に対応するので精一杯だったのだ。この原稿涸れの危機に対しては、編集委員、各地編集委員に大号令を発することに対応した。皆さんに大変頑張ってもらっていて、徐々に原稿の企画は増えてきたが、気づいたのが遅かったこともあって、原稿自体はなかなか集まらない。何と、3月15日の編集会議の議事録でも

[4月号] 25 + ? P

(シリーズ)「○○○○○○○○○○」

「○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○」

(○○)

25 P

*掲載する原稿がないため、もう少し待って、届いた原稿を載せる。

という状況であった³。結局この問題は4月5日の時点でもそのままであった。もはや、4月号の発行を大幅に遅らせるしかないと思われたのだが、4月12日の編集会議になってみると、155ページの立派な雑誌になっていた。何とも綱渡りの編集であったが、無事出版できることになって、執筆者の方々、編集委員の方々に感謝すること大であった。

時を少々遡るが、2月の編集会議の重要な議題の一つは編集委員の交代であった。これには当然編集長の交代も含まれる。一年前の約束で、私は一年限定で後任は太田さんということになっていたのだが、果たして「武末さんもう一年やりませんか？」という話が出てきた。しかし、このときは心の準備ができていた。そうそう思い通りには動かない。「約束だから」と押し返した。一年やってみてははっきりわかったのだが、やはり「物性研究」の編集長は基研所属のスタッフがやるべきだ。研究会報告など、基研の予定や方針が絡む問題が多数あるのである。基研外、まして吉田南などという辺境に住む人間が手がけるべき仕事ではない。何とか押し戻すことに成功したが、結局何だかんだ（忘れた）で、次期編集長となったのは太田さんではなく、現在も編集長を務める村瀬さんであった。私は、ヒラの編集委員として残ることになった。

退任間近、最後の一波乱があった。ご存じのように、本誌では修士論文を募集しているのだが、3月半ばになっても全く応募がないのである。まあ、締切間近になればどっとまとめて来るだろうと、高をくくっていたのだが、29日になって刊行会の野坂さんから悲痛なメールが送られてきた。何と、修論募集のポスターを送るのを忘れていたというのだ！大変なことをしてしまった！平謝りの野坂さんであったが、私は冷静だった。そんなポスターの影響力なんかたかが知れてる。大丈夫、案外うまくいくだろう、と編集長の職にもようやく慣れた私は思い、皆さんに声をかけていざとなったら締切延ばせばいいよと答えたのであった。案ずるより産むが易し。月末の締め切り日（3月31日）には昨年と同数の修論が到着し、あと数編届く予定だという野坂さんからのメールがやってきた。

ということで、最後までドタバタ天手古舞いの一年であった。何も新機軸を打ち出したわけでもなく、ただただ諸問題に翻弄され続けるだけの編集長であったが、共に活動してくれた編集委員会のメンバーと各地編集委員の方々に感謝申し上げたい。最後に、非力な私を励まし、支えてくれた野坂さんには特段の謝意を表したい。問題が起こるたびに、野坂さんとメールで大騒ぎしたことだけが、楽しい思い出として残っています。

³唯一決まっていた25ページの原稿の詳細は伏せておく。